

東日本大震災の際に撮影された生々しい津波の映像は、私たちにあらためて津波の実像と恐ろしさを認識させたのではないのでしょうか。

当時この映像を見た人々からは「これは波という代物ではない」、「こんな海の塊が津波だとは思っていなかった」などとという声が多く聞かれました。

私たちが普段見かける「波」は、高いものでも台風に伴う高波くらいなものでしょう。台風接近時、海面が上昇する高潮と重なれば、その高波もやすやすと防波堤を越えることがあり、浸水害等に対する警戒が呼びかけられますが、押し寄せる波の周期はせいぜい十秒程度というものです。

これに比べ津波の場合は短いもので数分、長いものになると一時間を超す周期になり、まさに壁となった海水が、延々数kmから数十kmにわたって連なり襲ってくるもので、これが我々がふだん目にする波とは大きく違う点なのです。

作家吉村昭氏の「三陸海岸大津波」は、東日本大震災後に再度注目された本ですが、この本の原題は「海の壁」というものだったそうです。記録文学と呼ばれる程の徹底した取材を元にした氏の作品だけに、当時被災した人々の証言から受けた津波の印象は、まさに「壁」そのものだったのでしょうか。

繰り返し津波被害を受けてきた三陸沿岸地方を始め全国には、かつていろいろな伝承や思い込みにより、被害を拡大させたという歴史があります。「津波は引き潮から始まる」、「晴れた日には津波は来ない」、「津波の前には井戸の水が枯れる」。これはいずれも誤った認識です。また、昭和8年昭和三陸地震津波では、明治29年の明治三陸大津波の際のゆっくりした弱い揺れの経験をもとに、強い揺れの時は津波が来ないと思い込み、避難せずに被害にあった人もいたそうです。

間違った思い込みは、自らを危険に晒すこととなります。津波災害から身を守るには、注・警報の発表を待つことなく、強い揺れを感じたら、とにかく一刻も早く沿岸部から高台へ避難することが必要なのです。

